

## STORY 12 町家の温故知新

### 登場人物

杉木さん（32歳）      ゆきじ君（6歳）

新年が明けて早一ヶ月、節分を迎えた杉木家の居間では杉木とゆきじがだらだらとテレビを見ていた。

ゆ：ああっ！あれはっ！

ゆきじが大きな声をあげてテレビを指差した。

杉：なんや！！

ゆ：この前、舞蝶寺町に遊びに行ったときに会った駄菓子屋のおっちゃんや！

ヒデオ（以下、ヒ）：・・・このように私たちは、わが街に誇りを持てるまちづくりに取り組んでいます。和の雰囲気大切にすることで、この街が持つ伝統文化がまちなみからも感じられるようになり、さらに、最近は町家を使った店もオープンして、街に活気がでてきました。ところで、うちの店1番のオススメはこの私なのですが、それに続く人気商品は・  
・・・



ゆ：おっちゃん、何か妙なことを言ってたなあ……。まちや？何なの？「まちや」って？

杉：古い家のことなんじゃないか。詳しくは……。オットく〜ん！

**まかせてちょうオだい！**

**まちやとは！？**

まちやは、町家とも町屋とも書きます。はっきりとした定義はないのですが、江戸時代から戦前頃までに、都市部に建てられた店と住まいが一緒になった建物と言えます。

戦火を逃れた街には、たくさんの町家が残っていることが多いです。今では店をやめて住宅として使っていることも多いです。



ゆ：舞蝶寺町へ町家を見に行こうよう！ぼく、お年玉の残りでおっちゃんの店でお菓子を買いたいしね！

杉：お父さんは、この後、テレビでサッカーを見たいんやけどなあ……。ま、ゆきじがそこまで言うなら、出発だ！

二人は舞蝶寺町に到着し、まっすぐにヒデオさんの駄菓子屋に向かっている。

ゆ：あっ、あれは鬼だあ！  
え〜い！鬼は〜外〜。福は〜内！（パラパラ）

杉：……。いきなりどうしたんや？しかも、なんで豆を持ってるんや！さらに、ここはもともと外やぞ！

ゆ：お母さんに今日は節分だし、お菓子里に豆をもらったんだ。

杉：ところで、鬼ってなんや？

ゆ：あれ、あれ。あそこに鬼がいるんだよ！

ゆきじが指差す方向を見て、小さな像を見つけた杉木。

杉：あれかあ、あれ鬼か？



杉木さんが困っていたところに、人のよさそうな男性が歩いてきた。

菊沼（以下、菊）：何か困っているのかい？

杉：この子が見つけた、あの鬼のようなものが何なのか分からなくて困っているんです。

菊：ぼうや！いいものを見つけたね！あれは、中国の故事にちなんだ魔除け、厄除けのために小屋根の上に置かれているんだ。大きさは10〜20センチくらいかな。この辺りの人たちはみんな「鍾馗（しょうき）さん」と呼んでいるんだよ。

ゆ：おじさん、すごい！ところで、おじさんは何をしている人なの？

菊：おじさんは大工なんだ。新しい家も作るけれど、古い家を直す仕事も得意なんだよ！

ゆ：さっきテレビで見たんだけど「町家」ってどこにあるのですか？

菊：ぼうやが見ているこの鍾馗さんがある家も「町屋」だよ！建物の表に格子があって、壁は漆喰が塗ってあるでしょう？



菊：ところでこの町では、地区計画というまちなみに関するルールを決めていることは知っているかな？

ゆ：この前、駄菓子屋のおっちゃんから教えてもらったよ。

菊：なるほど。和風をコンセプトにした地区計画を決めたのは、この街には古い歴史があること、町家のような古い建物があることなどが理由なんだ。ところで、町家の中には入ったことがあるかい？

ゆ：ないない。入ってみたいよ～！

菊：じゃあ、うちにおいで！

ゆ：本当に！！やったあ～！



道端で話す3人の様子を黒ずくめの男が電柱の影に隠れて見ていた。菊沼さんの家に向かって歩き始めた3人の後を静かにつけていく。何物なのか！その正体はいまだ不明！

しばらく歩いて菊沼さんの家に到着した3人。

菊：どうぞ、ゆめじ君お入り。

ゆ：ゆめじじゃなくてゆきじだよ。（ガラガラガラ）あれっ、靴のままずっと奥まで入っていきけるぞ。

菊：表から奥まで土間になっているんだ。これを通り庭とって、その途中には台所もあるよ。

ゆ：うわあ～、天井が高い！しかも意外と明るいねえ！

菊：私は通り庭から天井を見上げたときに目に入ってくる黒い木組みと白い漆喰壁のコントラストが好きなんや！この家の歴史を感じられるし、私もこんな家を造る時代に働きたかったねえ！

